2013年8月7日放送

風疹の流行と先天性風疹症候群

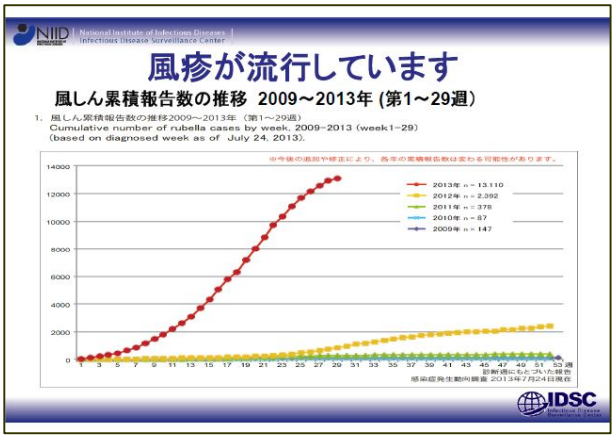
国立感染症研究所　感染症疫学センター
第三室長　多屋　馨子

【風疹とは】

風疹は発熱、全身性の発疹、耳の周りや首の周りのリンパ節の腫脹を特徴とするウイルス感染症です。発熱は半分の人にしか見られず、逆に40度以上の高熱になる人もいます。三つの主な症状がそろわないこともよくあって、症状だけでは診断が難しい病気です。感染しても症状が出ない不顕性感染も15-30%程度あります。

ことし（2013年）、風疹が大規模に流行しています。７月24日時点の集計では、１万3110人の患者が報告されています。発熱が89.2%、発疹が99.5%、リンパ節腫脹が71.7%、関節痛や関節炎が19.1%と、三つの主な症状がそろっていない人も多くいます。

風疹の合併症として、風疹脳炎と血小板減少性紫斑病がありますが、去年は一年間で風疹脳炎が５人、血小板減少性紫斑病が13人であったのが、ことしはまだ７月７日の時点で風疹脳炎が11人、血小板減少性紫斑病が54人報告されています。



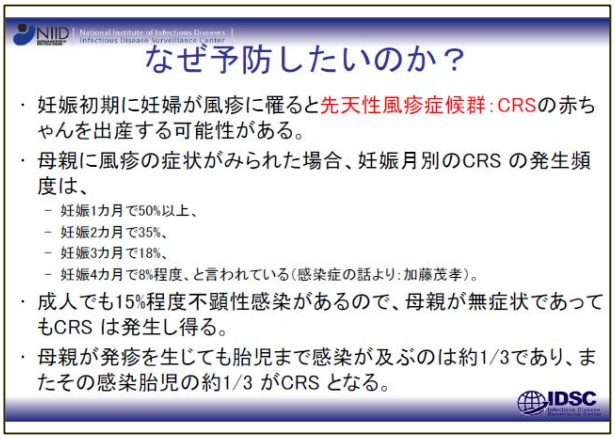
【風疹の感染経路】

風疹ウイルスに感染すると、2-３週間の潜伏期を経て、発熱や発疹等で始まります。飛沫感染で感染伝播します。発疹が出る前１週間ぐらいから人にうつし始めますので、感染対策が難しい病気です。発熱が下がって発疹が消失すれば､排出するウイルス量も激減し、急速に感染力は消失していきます。

【風疹を予防する理由】

なぜ風疹を予防したいのか。その最も大きな目的に先天性風疹症候群の予防があります。妊娠20週ぐらいまでの妊婦、風疹に対する免疫を十分に持っていない妊婦が風疹ウイルスに感染すると、胎児にも風疹ウイルスが感染することがあります。妊娠１カ月ですと半分以上、２カ月で35%、３カ月で18%、４カ月だと８%程度が胎児に風疹ウイルスが感染し、先天性風疹症候群の症状を持って生まれたという報告があります。成人でも15%程度は不顕性感

染と言われていますので、お母さんが無症状であっても、先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれることがあります。逆に、お母さんが風疹と診断されて、発疹が出ても、胎児まで感染が及ぶのは約1/3、またその胎児の約1/3が先天性風疹症候群の症状を持っています。



【先天性風疹症候群とは】

では、先天性風疹症候群とはどのような症状でしょうか。

難聴が最も多く、白内障や緑内障、色素性網膜症などの眼の症状、動脈管開存症や心室中隔欠損、肺動脈狭窄、大動脈縮窄などの先天性心疾患など眼、耳、心臓の三つの器官に生まれつき病気を持ってしまうことがあるのがこの病気です。そのほかにも、低出生体重や血小板減少性紫斑病、小頭症、小眼症、精神運動発達遅滞など、さまざまな症状を持つことがあります。

【風疹の予防接種の経緯】

日本では1977年に風疹の定期の予防接種が始まりました。51歳の男女は一度も風疹ワクチンを受けていないと思います。34-51歳の女性は、中学生のときに学校で集団接種を受けていますので、接種率が高く、この年齢の女性は今も発症者が少ないのですが、34-51歳の男性はこれまで一度も風疹のワクチンを受けるチャンスがありませんでしたので、免疫を持っていない人が多く、患者の多数が男性の30歳代、40歳代となっています。

また、25歳６カ月から34歳までの人は、男女とも１回、中学生のときに風疹ワクチンを受けるチャンスがあったのですが、学校での集団接種ではなく、保護者と一緒に医療機関に行って受ける個別接種に変わりましたので、接種率が激減してしまいました。その結果、現在、20-30歳代の男女とも多く風疹に罹患しています。

逆に、23歳以下の人は２回のワクチンの接種機会がありました。ただ残念なことに、高校３年生相当年齢のときに２回目のワクチンを受けるチャンスがあった人は、接種率が低く、現在、風疹を発症されている人も多くいます。

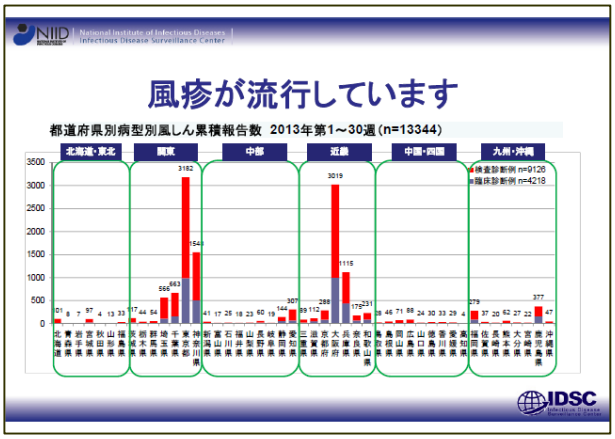
中学生の女子だけに風疹ワクチンが接種されていた時代というのは、妊娠中に風疹にかかるということを予防しようというコンセプトだったと思いますが、女性だけがワクチン接種を受けていたのでは、風疹の流行はコントロールできず、数年に一度、大規模な流行を繰り返していました。そのために、1995年４月から、男女幼児（１－７歳半まで）、そして男女中学生が風疹ワクチンの定期接種の対象となったのです。

【風疹の流行】

2004年、日本では風疹の流行がありました。子どもたちも多く罹患しましたが、大人も多く罹患しました。その結果、10人の先天性風疹症候群の赤ちゃんが報告され、風疹流行及び先天性風疹症候群の発生抑制に関する緊急提言が出されたのが、平成16年です。それ以降、風疹の流行は非常に抑制されていましたが、2011年、アジアの国々で風疹が大流行しました。ベトナムでは数百人の先天性風疹症候群の赤ちゃんが生まれたと報告されています。恐らく免疫を持っていない人がアジアの国々に出かけて行き、海外で感染して帰国してから発症したのでしょう。2011年、小さな規模の流行が散発的に起こっていましたが、2012年は全国流行となり、2013年はさらに大規模な流行となっています。去年のピークは７月末でしたが、「ことしは年初から風疹が流行しています。大人が多く罹患しています。」と多くのメディアが取り上げ、全国の人々が今大人で風疹が流行していることを知ってくださるようになりました。

ことしの流行規模は大きく、現時点で昨年の15-20倍程度の患者が出ています。現在も１週間に

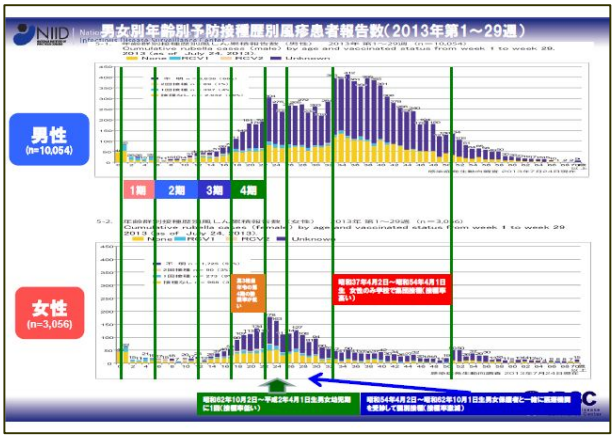
200人程度の患者が報告されている現状です。ただ、全国流行とは言っても地域差があります。大規模に流行しているのは特に関東地方と近畿地方です。その次に多いのが九州地方です。現在、日本を含めた西太平洋地域は、人口100万人当たり10人以下の風疹、そして100万出生当たり10人以下の先天性風疹症候群の赤ちゃんの出生ぐらいまでの抑制を目標に、麻疹風疹対策に力を入れています。しかし、現在、日本では、人口100万人当たり102人とその目標の10倍を超える患者が発生しています。特に多いのは大阪府で、人口100万人当たり335人と非常に多くの患者がいます。次いで多いのが東京都で、人口100万人当たり230人を超えます。和歌山県と鹿児島県も人口100万人当たり230人を超えています。合計で１万3110人という大規模な流行になっています。



【現在の風疹ワクチンの定期接種】

さて、現在の風疹ワクチンの定期接種は、どのような人に行われているのでしょうか。

2013年度からは１歳と小学校入学前のお子さんの２回接種になっています。接種を受けるワクチンは麻疹風疹混合ワクチンが原則です。しかし、2008年度から2012年度までの５年間に限っては、これに加えて中学１年生と高校３年生のときに２回目の風疹ワクチン接種を受け、そのワクチンは麻疹風疹混合ワクチンで接種するという制度でした。この５年間で2039万人を超える方が麻疹風疹混合ワクチン接種を受けています。その結果、こんなに大規模に流行しても、子どもの発症は非常に少なく、現在１万3110人のうち約９割が20歳以上という流行になっています。ただ、残念なことに、過去５年間で268万人余りの人が定期の予防接種のチャンスを逃してしまっています。



現在、多くの市町村が風疹ワクチン接種に公費助成をしています。また、会社を挙げて風疹ワクチンの接種費用を出している会社もあると聞いています。対象はこれから妊娠を希望されている女性、そして妊婦の家族です。というのは、妊娠中は風疹ワクチン接種を受けることができないからです。妊婦の周りにいる家族や同僚がワクチン接種を受けることで、妊婦に風疹ウイルスを届けることがないように、風疹の予防接種で未来の赤ちゃんを守れますというポスターをつくって、厚生労働省、国立感染症研究所、そして関連する多くの学会が風疹の予防啓発を呼びかけています。

今、ワクチン接種を受けていないと思う人、かかったこともないと思う人は、かかる前に風疹ワクチン接種を受けておきましょう。特に妊娠を希望されている女性は妊娠前に受けて、２カ月間は妊娠を避けていただく必要がありますので、まさに今、受けるチャンスだと思います。

「小児科診療 UP-to-DATE」
http://medical.radionikkei.jp/uptodate/